芦屋大学論叢　第84号
（令和7年7月30日）抜刷

《実践報告》

学園資源を活用した地域連携型スポーツイベントの実践と課題

－JAPAN KIDS FES の報告－

金　　相　煥
飛　石　孝　行

《実践報告》

学園資源を活用した地域連携型スポーツイベントの実践と課題
－JAPAN KIDS FES の報告－

金　　相　煥（1）
飛　石　孝　行（2）
（1）芦屋大学臨床教育学部
（2）兵庫教育大学大学院　修士課程

序章

近年、地域スポーツは単なる身体活動の枠を超えて、地域社会における交流促進や課題解決のための重要なツールとして注目を集めている。地域住民の健康増進やコミュニティ形成に資するだけでなく、地域資源の有効活用や教育的効果を含んだ社会的機能が期待されている。

本研究では、芦屋市において 2022 年から 2024 年にかけて実施された「JAPAN KIDS FES」と題する 3 回のスポーツイベントを取り上げ、スポーツを媒介とした地域交流と課題解決への寄与について実証的に検討する。各イベントは、企業、自治体、教育機関（特に学生）との連携によって実施され、多様な年齢層や背景をもつ地域住民の参加を得ることに成功している。

これらのイベントでは、サッカーを基盤にしつつも、障がい者スポーツ体験、防災教育、キッチンカーやマルシェ、企業ブース、伝統文化体験（例：「だんじり」）など、幅広いコンテンツが展開された。2023 年にはウクライナから避難した女性たちによる料理の提供や、子供たちのステージ発表が話題となり、2024 年には高島凌輔芦屋市長をはじめとする地域のリーダーや住民の積極的な参画が見られた。

本研究では、これら 3 回のイベントを通じて得られた記録と参加者データを基に、スポーツイベントが地域社会にもたらす多面的な影響を検証し、特に企画・運営体制の構築、参加者の反応、地域社会への波及効果に焦点を当てて分析する。

目的

本研究の目的は、スポーツイベントが地域社会における交流と課題解決にどのように寄与するのかを明らかにし、その成果を基に持続可能な地域スポーツの発展に資する実践的な提言を行うことである。新型コロナウイルス感染症の影響により、地域住民の心身の健康のみならず、対面による人間関係や地域間のつながりも希薄化している現在、地域イベントはその回復を支える重要な役割を担っている。特にサッカーを主軸とするイベントは、老若男女問わず多くの参加者を惹きつけ、地域内外からの来場者に交流の機会を提供する優れた媒体となる。また、キッチンカー、マルシェ、防災訓練といった多様なプログラムの導入により、健康・防災・文化・経済といった複合的な地域課題へのアプローチも可能としている。さらに、芦屋学園（大学・高校）の学生が運営や企画に携わることで、地域の将来を担う若者による地域参画の実践の場ともなっている。学生たちは企業や行政との協働を通じて、地域課題への理解と解決能力を養うとともに、キャリア教育としても意義深い学習経験を得ている（Future Project 芦屋モデル）。また、生徒会や医療系専門学校の学生の参画により、人的資源の多様性も高まり、地域経済への波及効果や人材育成の観点からも評価される。

このような背景を踏まえた上で実施された 3 回のイベントの成果と課題を多角的に分析し、地域スポーツイベントの今後の企画・運営に資する知見を提供することが本研究の核心である。

第 1 章：第 1 回イベント（2022 年 10 月 10 日）

2022 年 10 月 10 日に兵庫県芦屋市で初開催された本イベントは、サッカーを中核とした多様な地域交流プログラムを通じて、企業・学生・地域住民が一体となるモデル的な取り組みとして実施された。参加者は約 1,000 名にのぼり（図 1）、子どもから高齢者まで幅広い層が参加した。

まず、地域の小学 4 年生を対象にした少年サッカー大会（12 チーム参加）を実施（図 2）し、地域外からの集客を含めてスポーツによる観光誘致を図った。次に、ウクライナからの避難者によるキッチンカーの出店が行われ、異文化交流の場となるとともに、販売利益を避難者支援に活用する社会貢献の一環ともなった。さらに、障がい者スポーツ体験としてアンプティサッカー（図 3）、デフサッカー、視覚障がい者サッカーの体験会を実施。来場者が実際に体験する機会を通じて、共生社会への理解促進を図った。

そのほか、10 店舗のキッチンカー（図 4）による地元食材を活かした飲食体験、13 の企業ブースによる PR 活動や子ども向けの職業体験、健康関連ワークショップ、縁日や体験型イベントなどが開催され、来場者に学びと娯楽の両面で満足を提供した。また、SDGs をテーマとしたワークショップ、水環境の学び、地域の伝統文化である「だんじり」体験、わかばこども食堂の協力なども展開され、多角的な視点から地域交流と持続可能性の啓発が行われた。このように第 1 回目のイベントは、スポーツを中心としつつも社会的包摂、異文化理解、地域経済活性化、キャリア教育、防災・健康啓発など、複数の社会的目的を内包する包括的な地域イベントとして機能した。

図 1　総勢 1000 人の参加

図 2　主催者側を代表して挨拶（金）（サッカー大会）

図 3　アンプティーサッカー体験

図 4　キッチンカーによる飲食体験

第 2 章：第 2 回イベント（2023 年 10 月 9 日）

2023 年 10 月 9 日に開催された「JAPAN KIDS FES in ASHIYA 2023」は、「スポーツと防災」を主要テーマとして掲げ、こどもの教育、健康促進、地域文化の継承を包含した総合的な地域交流イベントとして展開された。約 2,000 名の参加があり、前年度の成功を踏まえて、より広範な世代と分野を巻き込んだ活動が展開された。本イベントでは、企業・学生・行政の連携により多様なコンテンツ（図 5・6）が実施された。少年サッカー大会（小学 4 年生対象、8 チーム参加）と、初の試みとして走り方教室（低学年・高学年別）やバブルサッカー（図 7・8）を開催し、サッカー経験の有無にかかわらず幅広い児童の運動参加を促進した。これにより、地域外からの集客と観光誘致にもつながり、地域活性化の一助となった。防災・防犯の教育面では、阪神淡路大震災の経験を踏まえた地域住民による講話が行われ、若い世代へ災害への備えや地域の記憶の継承が図られた。参加者に対する実践的な防災知識の提供は、持続可能な地域づくりへの重要な布石となった。また、障がい者スポーツ体験としてアンプティサッカーのプログラムを継続実施し、関西 Sete Estrelas の選手たちとの交流を通じて、参加者の共生社会への理解をさらに深めた。今井絵理子参議院議員および高島芦屋市長も来場し、行政・政治と市民の接点が形成された。健康促進の面では、地元食材を用いたキッチンカーの飲食提供、健康関連企業によるワークショップ、専門家による健康相談などが実施された。子どもたち向けの健康プログラムや体験型運動教室も併催され、参加者の健康意識の向上に貢献した。さらに、企業ブースにおける職業体験、PR 活動を通じた地域産業の認知度向上が図られ、地域の子どもたちによるステージ発表や女性アイドルグループによるライブなど、エンターテインメント性を含んだ文化発信の場としても機能した。

終盤には、地域高校生や大学生とともに実施されたクリーンアップ活動により、環境美化と地域連帯の強化が図られた。あわせて、「だんじり」体験や「わかばこども食堂」も行われ、地域文化への理解と参加意識が深められた。

図 5　地元の子供たちと交流する大学生

図 6　地元の子供たちとサッカーをする大学生

図 7　大人気だったバブルサッカー

図 8　試合も白熱していた

第3章：第3回イベント（2024年10月14日）

2024年10月14日に開催された「JAPAN KIDS FES in ASHIYA 2024」では、「スポーツと防災の融合による地域の絆形成」を継続テーマとして掲げ、過去2回の経験を活かしたさらに成熟した地域連携型イベントが実施された。企業・学生・行政が引き続き連携し、地域全体の活性化と共生社会の実現を目指した取り組みが行われた。本イベントには芦屋市長をはじめとする地域関係者も参加し、子どもから高齢者まで幅広い来場者が集まり（図9）、スポーツの秋を堪能するとともに、地域の多様な課題に対する関心と理解が深められた。まず、地域の小学4年生を対象とした少年サッカー大会（6チーム参加）と、年齢別の走り方教室が実施され、サッカー未経験の子どもたちにも運動機会を提供した。特に地域外（例：大阪府泉佐野市）からの参加もあり、スポーツを通じた広域的な交流と観光誘致の実績を築いた。防災・防犯に関する教育プログラムでは、阪神淡路大震災を契機とした地域の防災意識の継承を図るべく、語り部による講話やワークショップを実施。特に高齢者施設の多い潮芦屋地域では、世代間の対話と共助体制の強化が重要なテーマとして取り上げられた。障がい者スポーツ体験も引き続き展開され、アンプティサッカー（図12）に加え、ロービジョンフットサル（視覚障がい者サッカー）が新たに導入された。前者では義足を使用した選手によるデモンストレーションと参加体験が、後者では視覚を遮断した状態でのプレー体験が提供され、参加者の共感と理解を深めた。キッチンカーエリアでは、地域産の食材を活用した多様な料理が提供され、食育と健康促進の一環として専門家による栄養指導や健康相談も併せて実施された。企業ブースにおいても地域産業のPR、職業体験の提供を通じて、参加者のキャリア教育と地元経済の認知向上が図られた。また、子どもたちによるステージパフォーマンスやアイドルライブが行われ、イベントの賑わいを演出すると同時に、文化的な表現の場としても機能した。環境意識の向上を目的としたクリーンアップ活動が、地域住民や学生ボランティアとともに実施され、持続可能な社会に向けた意識改革を促進した。あわせて、「だんじり」体験（図11）や「わかばこども食堂」も実施され、地域の伝統や文化を実際に体験することで、参加者の地域愛着心を高めた。

図9　芦屋市長と大学生・サッカーに集まった子供たち

第 4 章：今後の展望

これまでの 3 回にわたる「JAPAN KIDS FES」は、地域住民、企業、行政、そして教育機関の連携により実施され、芦屋市における地域課題解決型のスポーツイベントとして多くの成果を挙げてきた。今後も本フェスティバルを継続的に開催し、年 1〜2 回を目処とするシティプロモーションの一環として、地域の持続可能な発展に貢献していく方針である。その中核には、芦屋大学を中心とした学生参画の仕組みがあり、若者による地域課題への関与と、実践的なキャリア教育の場が創出されている。また、イベントの内容はサッカーに留まらず、防災教育、高齢者支援、環境保全、文化継承、健康促進といった多角的な社会課題への対応を含み、地域社会の包括的な活性化を目指している。イベントの成功の鍵となるのは、地域住民、企業、行政、学生といった多様な主体の協働であり、今後もこの連携体制の強化が不可欠である。とりわけ、サッカーという共通の関心から派生する形で、キッチンカー、マルシェ、障がい者スポーツ（図 12）、SDGs 啓発、防災訓練、伝統文化体験（図 13）といった複数の要素が融合し、サッカーに興味のない人々をも巻き込む包摂的な場が形成されている点は、本イベントの特筆すべき成果である。また、芦屋市という地域性を生かした企画（例：「だんじり」体験、わかばこども食堂など）は、地元文化の再発見と住民同士の絆形成に寄与しており、今後はこうした取り組みを他地域にも波及させていくことが検討される。近隣都市との連携による共同開催やモデル展開も視野に入れ、広域的なネットワーク構築と情報発信を進めていくことが重要である。最後に、本イベントの運営に関わったすべての参加者、協力団体、地域住民に深い感謝の意を表する。本研究で得られた知見と経験は、地域スポーツイベントが単なるレクリエーションに留まらず、社会的包摂、教育、福祉、文化の発展に貢献しうることを実証するものであり、今後の地域政策や教育実践に資するものである。

図 10　高島芦屋市長と大学生

図 11　「だんじり」体験

図 12　アンプティサッカー体験

図 13　防災訓練、伝統文化体験